

## はじめに いま なぜ 教育課程と授業づくり実践なのか

梅原 利夫

近年とくに文科省から推奨されている学びの姿に、次のような文言が多用されている。

「主体的・対話的で深い学び」(学習指導要領総則)

「個別最適な学びと協働的な学び」(「令和の日本型学校教育」答申)

これら一見すると魅惑的な学びのスローガンが叫ばれるなかで、肝心の学校現場では、かえって授業と学びの定型化の圧力が浸透してきている。「授業の画一化・スタンダード化」「ワークシートやグループワークの機械的な実施」「めあて—各自の考え—発表—振り返り」というパターン化された授業展開などである。そうした行為によっては、必ずしも子どもの認識の深化や教師の実践の創造性には結びつかず、かえって表層的に「学びの形骸化」が進行している場合が多い。

もともと教師および教師集団に期待されているのは、学校教育全体を通して、子どもたちにどのような諸能力を育て、どのような人格を形成しようとしているのか、その計画化と実践に全体として関わることである。そして日常的には、教育的はたらきかけの典型としての授業を展開する過程で、教材化(目標にむけて教育内容を選択し具体的な素材を提供する)の作業と学習指導の局面にもっとも力を注いでいくことが求められている。そうした教育活動にこそ、教師の専門性が存分に発揮されていてほしい。それは学ぶテーマに対して研究的であり、子どもの認識形成について実践的であり、人間同士の相互関係作用について創造的な行為なのである。

加えて近年は、とみに教育活動に ICT の利活用がなされてきているが、それも利活用自体が最終目的のではなく、学習を進める上での手段の一つとして有効に発揮できるかどうか、その意義がかかっているのだ。

私たちが進めてきた共同研究の過程で、これまでに積み重ねられてきた教育課程と授業づくり実践のなかに、たくさんの貴重な教育的価値を発見することができた。そこには、教育の対象として子どもの実態をどうとらえどのように理解するか、学習の対象として教育内容や教材をどう編成していくか、

子どもを学びの主人公として成長を促し、教師が支援や指導の主体となるにはどんな努力や工夫が必要かなど、たくさんの掘り出しうる価値が発見される。それらを発掘し分析することは他でもない、現在とこれからの教育実践に十分に生かすことができると考えているからだ。

本特集の主題を「未来をひらく」と位置づけた理由はそこにある。

本特集では、公立中学校社会科の授業と私立高校家庭科の教育課程と授業づくりの実践を取り上げた。いずれも、この 30~40 年にかけて仲間とともに創造されてきた実践の特徴を、いくつかの時期区分に分節化し、全体としてその教育的価値を明らかにしようとした。

そこでは、いわゆる「荒れた学校」時代に格闘した子ども理解の苦労からはじまり、2011 年 3.11 の東日本大震災から 2020 年以来のコロナ禍を経て今日に至るまでの、日本と世界をおそった激動の教育状況に直面して、授業で何ができるのかを真剣に探り対応の仕方を掘り出そうとした。

また教育実践の主体である個々の教師人生は、決して孤立して歩まれたものではないこともわかった。学校内外での自主的な研究諸団体(民間教育研究団体、教職員の労働組合による研究活動など)に参加し、旺盛な共同研究や学習活動から学んできた豊かな軌跡が見られた。とくに、校内での同僚との語らいや学び合いも、重要な活力や意欲を与えてくれることが確認できた。

本特集は、民主教育研究所に組織されている教育課程研究委員会による、2 年半にわたる共同研究の成果である。中学校教師であった滝口正樹さんも、高校教師である鈴木博美さんも、21 世紀になってからの本研究委員会の有力なメンバーであり、この共同研究を通して、私たちは足元に貴重な実践の宝物が埋まっていることを再認識させられた。

本書がこれからの実践の創造に多面的に生かされることを期待して、この共同作品を教育界に送り出したい。